

様式1

令和4年度学校評価報告書
渋谷区立笹塚小学校

令和4年度 学校評価報告書

令和5年2月24日
渋谷区立笹塚小学校

(1) 新たな学びの実現

【ア】 自己評価

重点目標		① 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進し、学びの質の向上を図る。 ② 場面に応じて ICT を効果的に活用し、自らの学びを深めたり高めたりする能力を育成する。 ③ 生活科や総合的な学習の時間（シブヤ科）における、「探求的な学び」の充実を図る。			
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果	評価
①	保護者アンケート 1(1・3)の肯定率を 80%以上にする。教員も児童も、日々の授業における「学びの深まり」を感じることができている。	<ul style="list-style-type: none"> 学年や教科の打ち合せにおいて「学びの深まり」の見取り方を共有する。 児童に「何ができるようになったか」という視点で学習を振り返らせる。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 探究学習の進め方についての教員の理解が深まり、協働的な学びについて保護者から一定の評価を得られた。 児童同士の「学びの共有」はある程度できたが「学びの深まり」が課題である。 	B
②	保護者アンケート 1(5)の肯定率を 85%以上にする。学年の発達段階や学習の場面に応じて、タブレット等を効果的に活用している。	<ul style="list-style-type: none"> 授業におけるデジタル教科書(教材)の積極的な活用を推進する。 効果的な活用方法について共有したり広げたりする手立てを工夫する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 教科によって差があるがデジタル教科書は積極的に活用することができた。 共有場面での活用の幅は広がったが、深める手立てについてはまだ不十分。 	B
③	保護者アンケート 1(4)の肯定率を 75%以上にする。生活科や総合(シブヤ科)の学びが「調べ学習」ではなく「探究学習」になっている。	<ul style="list-style-type: none"> 校内研究を充実させ、笹塚小版の探究学習プロセスの構築を進める。 単年度実施に終わらない 6 年間を見通したカリキュラム開発に着手する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 今年度スタートを切れたことにより、各学年どのようなことをすればよいか見通しが見えた。 各学年の見通しが立ち、来年度より他学年との系統について考えられる。 	B

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
B	B	<ul style="list-style-type: none"> デジタル教科書を活用して調べる、理解する、分かる学びの深まりが 6 年間を通し、つながっていくとよい。 「学びの深まり」とは子供たちのどのような姿や発信、表現から見とるのか、教員の間で考察と共有を深めていく。 地域連携学習やプログラミング学習を通じて、探究学習を進めようとしていることは評価できる。タブレットの普段の活用例や「シブヤ科」での取り組みについて、さらに分かりやすく保護者に伝える工夫が必要と思われる。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない

(2) 安心・安全に挑戦できる環境

【ア】 自己評価

重点目標		① いじめや不登校等の問題について、未然防止と早期発見・早期解決に努める。 ② 特別支援教育に関する専門性を高め、インクルーシブ教育の推進に努める。 ③ 互いのよさを認め合い、思いやりの心や自他を尊重する態度を育成する。			
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果	評価
①	保護者アンケート 2(3)の肯定率を 70%以上にする。年度内未解決のいじめ案件を残さず、不登校児の状況が少しでも改善に向かう。	<ul style="list-style-type: none"> アンケートや面談結果等、情報を共有し早期発見や改善を図る。 校内の委員会の他、関係機関とも連携しながら対応に当たる。 	B	<ul style="list-style-type: none"> いじめ案件は対策委員会で迅速に対応しているが、不登校案件は未解決のものが複数件あり、解決が難しい。 関係諸機関と情報を共有・連携し、迅速に対応できた案件もあった。 	C
②	関係職員・家庭双方の、児童の特性についての理解が深まり、協力して具体的な手立てや対応を工夫し、指導の成果が見られる。	<ul style="list-style-type: none"> 職員間の連携を深め、児童や保護者の困り感に寄り添い支援する。 教員向けのインクルーシブ教育推進のための研修会を実施する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 夕会を活用して情報共有し、保護者への支援については教員の自己評価も高い。 教員向けの研修会については、内容や方法をさらに工夫していく必要がある。 	B
③	保護者アンケート 2(4)の肯定率を 75%以上にする。道徳や人権についての学びが学校生活における意識の変容につながっている。	<ul style="list-style-type: none"> 日常的に互いのよさや頑張りを認め合う活動を、全学級で取り入れる。 道徳を中心に自他の言動について深く考えさせ、思いやりの心を育む。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 各学級で取り組み、保護者の肯定的な評価も 75%を超えることができた。 公開講座での CS 委員や保護者からの「互いの意見を交流し合う議論する道徳」の様子についての評価が高かった。 	B

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
B	B	<ul style="list-style-type: none"> いじめや不登校は難しい案件で、家庭との連携も難しい。引き続き関係諸機関との連携を図り指導をお願いしたい。繊細な問題なので情報発信は難しいが、未然防止や解決にむけて取り組んでいる学校の姿勢は評価できる。 児童が自信をもっていることや自分の長所だと思ふことを、自他ともに認め合える機会づくりに期待したい。 個々の児童への接し方や対応が保護者に好意的に受け止められており、学校も改善に努めているのが認められる。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない

(3) 校務DX (働き方改革)

【ア】 自己評価

重点目標		① ICT を活用した「新しい働き方」を推進し、ワーク・ライフ・バランス改善を図る。 ② 校務全般において ICT を活用し、情報の共有や作業・打合せ時間の削減につなげる。 ③ 学校行事等の精選やスリム化を図り、時間や手間を減らして成果を上げる。			
評価指標		取組内容 (具体的に)	評価	成果	評価
①	休日に出勤する職員の数や日数が少なくなり、平日の在校時間が短くなる。自宅等で隙間時間に働ける ICT 活用法が普及する。	<ul style="list-style-type: none"> 可能な範囲で、ライフスタイルに合わせた柔軟な働き方を推奨する。 効果的な ICT 活用方法を互いに紹介し合えるような機会を設定する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ICT の活用が働き方改革につながったと回答した教員は約 70%であった。 校内の ICT 研修や学年会で授業以外での効果的な ICT 活用の情報共有ができた。 	B
②	教員対象に調査を行い、実感として印刷作業等の手間の削減、打合せ時間の短縮につながったという職員の割合を 85%以上にする。	<ul style="list-style-type: none"> 日常的な共有、伝達のツールとして、Teams の活用をさらに推進する。 現在、紙媒体で残っている記録を、順次 OneNote に切り替える。 	A	<ul style="list-style-type: none"> Teams のチャンネルによる伝達方法等を工夫し、職員の 85.7%が手間や時間の削減に効果があったと回答した。 OneNote 等を活用したことで時間が短縮され効果的であった。 	A
③	行事等の準備にかける手間や時間を、全体的に 1～2 割程度削減する。各取組において内容が工夫され簡略化が図られている。	<ul style="list-style-type: none"> 時間と手間を減らしてもねらいを達成できるよう、取組内容を工夫する。 教員側だけでなく、児童の活動時間や内容にも工夫・簡略化を図る。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 運動会や展覧会等各行事において取り組み方や内容を工夫し目標を達成できた。 「未来へのゴミ箱」で学校行事や校務に関する不必要な仕事を省く取組を進めた。 	A

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
A	A	<ul style="list-style-type: none"> ICT を活用して取組を工夫し、手間や時間の短縮につながっていることは評価できる。情報共有は大事なことで、そこは大事にしてもらいたい。ICT 活用を支援するサポーターの、配置や時間が増やせるとよい。 先例にとらわれない新しいアイデアを出し、さらに働きやすい職場にしようという意識で取り組んでほしい。 仕事内容の見直しは大切なことであるが、時間短縮のみにとらわれないようにすることも必要。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない

(4) 家庭・地域との協働

【ア】 自己評価

重点目標		① 学校運営協議会における協議内容を充実させ、地域に開かれた教育課程の実現を目指す。 ② 地域学校協働本部の活動を拡充させ、地域の人材・団体の教育活動への参画を推進する。 ③ 学校行事や校外学習への支援、日々の積極的な情報発信等、PTA・保護者との連携を図る。			
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果	評価
①	保護者アンケート 4(3)の肯定率を 75%以上にする。毎回の協議会で有益な議論がなされ、教育活動の改善や充実につながっている。	<ul style="list-style-type: none"> 開催回数を増やし、様々な教員を協議会に参加させ活性化を図る。 毎回の協議テーマを工夫し、工夫改善につながるような協議を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 教員の自己評価は高く、CS との連携を深められたが、保護者肯定率は 70%弱。 学力向上や体力向上、授業改善について協議し、有益な議論が行われた。 	C
②	保護者アンケート 4(2)の肯定率を 85%以上にする。毎回の協議会で有益な議論がなされ、教育活動の改善や充実につながっている。	<ul style="list-style-type: none"> 協働本部における既存・新規の事業開発を推進、支援体制を構築する。 協働本部を通じて地域の教育資源を活用した教育活動を展開する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 保護者肯定率は約 80%弱だったが協働本部主催事業は活動基盤が整ってきた。 生活科の地域学習や防災体験教室、高校部活動との体験活動等で成果があった。 	B
③	保護者アンケート 4(4)の肯定率を 80%以上にする。毎回の協議会で有益な議論がなされ、教育活動の改善や充実につながっている。	<ul style="list-style-type: none"> PTA 役員会等も活用しながら、必要な支援についての情報を共有する。 すべての学級において、H&S を活用した積極的な情報発信を行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> PTA との連携を十分に図ることができた。保護者の肯定率も約 85%であった。 全ての学級で H&S を活用した情報発信を行った。今年度一番の成果である。 	A

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C、=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
B	B	<ul style="list-style-type: none"> 通常の学校生活に必要な情報は、保護者に対して適切に発信されている。一方で地域連携や学校運営協議会の活動内容については十分に保護者周知が図られているとは言えず、広報の仕方に工夫、改善が必要である。 学校と PTA との連携は良好であることが分かる。また協働本部の活動も地域と連携できている。 学校の教育活動に、笹塚の商店街等、地域の特色を生かした活動をもっと取り入れていけるとよい。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない

(5) 特色ある教育活動

【ア】 自己評価

重点目標		① デジタル・シティズンシップ教育を推進し、ICT 機器や情報を正しく活用する力を育成する。 ② ICT も駆使した特別活動の充実を通じて、自主的・実践的に関わり創意工夫する力を育成する。 ③ 伝統文化体験や英語活動を通じ、自国・他国の文化を大事にする心や豊かな国際感覚を育てる。			
評価指標		取組内容（具体的に）	評価	成果	評価
①	保護者アンケート 5(2)の肯定率を 70%以上にする。学年の発達段階に応じて、正しい活用の仕方について考え、実践ができる。	<ul style="list-style-type: none"> デジタル・シティズンシップ教育の授業をすべての学年で実践する。 各学年の実践をもとに、笹塚小版の年間指導計画を作成する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 保護者アンケートの肯定率は 70%弱。 教員の 8 割がデジタルシティズンシップ教育の理念を理解し、複数の学年で授業を実施し、保護者にも発信した。 	C
②	クラブ・委員会活動、学校行事、学級活動など、特別活動のあらゆる場面で ICT を駆使した創意工夫のある活動が展開される。	<ul style="list-style-type: none"> Teams を使った情報共有や意見交換を様々な活動において実施する。 活動の事前指導や事後指導を充実させ、成果や課題を常に意識させる。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 学級活動や委員会等で積極的な活用が図られ、教師－児童間だけでなく、児童相互の情報共有も進んだ。 ICT を活用し、効率よく事前指導や事後指導を行うことができた。 	B
③	保護者アンケート 5(1)の肯定率を 70%以上にする。全学年で伝統文化体験を行い、自国の文化についての興味・関心が高まる。	<ul style="list-style-type: none"> 外部人材の活用や各種事業を活用して、伝統文化体験を実施する。 外国語（活動）と連動させ、体験や学びを発信する活動を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 狂言や落語、和菓子作り等、伝統文化を体験できる機会を昨年度より増やせた。 自国の文化・伝統に関する関心・理解は深まったが、他国と比較する等学びを深め発信する活動には発展できていない。 	C

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

【イ】 学校関係者評価

取組に対する評価	成果に対する評価	学校関係者委員会の見解について
B	B	<ul style="list-style-type: none"> 伝統文化等昨年度より体験を増やすことができ、教員とは違う大人からの学びは子供たちにも刺激的な学びになる。 デジタル・シティズンシップ教育や ICT 活用におけるリテラシーの育成など、教員間での理念の共有を。 コロナ禍の中にありながら 100 周年記念行事が工夫されて進められた点は評価できる。他校にない本校独自の特色ある教育活動について、どのように取り組み、どんな成果があったのか、具体的に伝えていく工夫が必要。

学校の自己評価は、A=適正である B=おおむね適正である C=適正ではない